

小学生時代の私はどんな子供だったのか

～その1. 同級生の作文から～

7組 山本 哲照

本サイト2023年12月22日の「無着成恭と小学校の恩師」で触れましたが城内小学校6年生時の担任教師岩本實先生は国語の授業で日頃仲良く学び、遊んでいる級友のことについて思った通りに書くという課題を出しました。私と中澤秀夫君は水口幸治君について書き、藤井暉生君、水口幸治君、望月郁文君、それにもう一人女子の杉本和子さんが私のことを書いてくれました。岩本先生が人と違っていたのは生徒に書かせた作文を書いた本人ではなく、書かれた生徒に渡してしまったということです。私は書いてくれた4名の作文をその場で渡されました。この作文は72年の歳月を経た現在も私の手元に保存してあります。仲良しグループを形成していた中澤、藤井、水口、望月の諸君はそれぞれ自分のことが書かれた作文を渡されたはずですが誰も保存していないし、そんなことがあったということも覚えていないそうです。2021年10月に小田高11期生の盟友望月郁文君が亡くなった時ご家族に乞われて彼が書いた作文のコピーをお渡ししました。優しく厳しかった「おじいちゃん」の子供の頃の直筆の作文を読んで彼のお孫さんたちは大喜びだったそうです。

今回はこの4名の級友が書いてくれた作文から私、山本哲照が小学生時代はどんな子供だったのかを振り返ってみることにしました。まずはレディファーストで杉本和子さんの作文から。

山 本 君

杉本和子

山本君は勉強はできるけど、とてもかんしゃくもちの様です。ちょっとした事でもすぐぶったり、毛を引っ張ったりするのでみんなからはあまりよくいわれていなかった。だれかとケンカをして先生にしかられると、相手の人の事をいいだすので先生が「山本君のことを聞いているんです」と言うといつも先生に口答えするのです。山本君はちょっとしたでも誰かが悪口のようなことを言うとき「何！もう一ぺん言って見ろ」というのです。そして相手が泣くまでいじめるのです。私は負けているのがきらいですから、山本君にいじわるされると、私も負けずに仕返しをしてやります。山本君は水口君と同じで、口先で人を泣かすのがとても上手です。山本君は妹思いだと言うけれど、学校に来るとどうしてこうみんなに意地悪をするのかと思うようです。

山本君のお得意は国語です。読書が好きなので国語のテストなどはいつも一番です。それは本をたくさん読むからです。山本君は辞典を引くのがとても早いので先生が山本君をよく指します。でも算数はあまり得意でもなさそうです。

でもこの頃はあまり山本君は意地悪などしなくなったので、みんなもあまり悪く言わないようになってきた。

ほんとに、いい山本君になりつつあります。そして又、僕はそれを信じています。自分でよく考える山本君故。(岩本先生の批評)」

※この杉本さんの作文は当時まだ存命だった私の父が大いに喜んで四百字詰原稿用紙に先生の批評も含めて自分で書き写し、常時持ち歩いていたそうです。それも保存してあります。

山本君という人 藤井暉生

山本君、これから僕が書こうとする人です。山本君のお父さんは小田原のけい察につとめています。お母さんは自分の家のお店をやっています。それに山本君に山本君の妹です。それから僕が山本君の嫌いな時は山本君は時々人が何もしないのに、ぶつ。これはくせだかなんだか知らないが、ぶつ。第二のきらいなところは、もし僕がちょっとゆうと、すぐ何とかゆう。僕たちの組では読書会をします。そしてほかの人が名前などで間違っとうと山本君がいつも本を読んでいるので、これはこういう名前です、これはこうですと言ってどんどん攻撃するのでみんな参ってしまいます。

次に山本君のいい所はとてもよく本を読んで色々なことを覚えているので勉強ができる。山本君は算数の時でも、国語の時でもどうゆう時でもはきはきとして答える。先生に指されても自分の思っていることをゆうゆうと話せるのが羨ましくなる。特に国語はすいすいとどんどん読んでいってしまいます。学校中でおととい、国語のテストをやった時など、城内の6年の中で一番でした。では皆さん、山本君についておわかりになりましたでしょう。おわり。

なんて、へたな文だ藤井君。ウサギのナントカみたいで、ポツンポツンしていて、ちっともまとまりがない。山本君のいい所、それは君が大いに学んで貰いたいし、悪い所、それは君が決してまねしないでもらいたい。二人を合わせて二分の一にすると、いいと僕は思います。(岩本先生の批評)

山本といゆう人間 水口幸治

姓は山本名は哲照が彼の名である。彼はすぐ人の話に茶々を入れたり、あやをつけたりしてあさっての方角からからんでくる。それが彼の性格なのだ。というよりも彼は人の話にけちをつけるのをほこりとしているらしい。「そういう僕も多分にあるらしいな」僕が彼にお前頭の方だいじょうぶか？頭に水つけたら蒸発してしまうだろう？と言えば、彼はそれこそ真っ赤に、かんかんになってゆでだこのようになって怒りだす。しまいには僕に「なんの決とうか知らないが」決とうを申し込む。僕はうまくずらかる。

だが彼には一寸良い所もある。僕が何か物を尋ねれば一面けいべつしながらも親切に物をおしえてくれる。大部分の級友は彼を白い眼で、見るが僕は彼を好きである。「僕が変人であるのだろう」

彼は読書が非常に好きであるらしくひまさえあれば図書室にいつている。又、国語はもちろん社会科に於いてはその才能を充分にはつきして級で一と思う。

映画は彼の大好物である。その他何でも僕に打ち明けて話す。そのためか僕も彼を信用して話をする・・・仲間が良いとけんかをするさ。へへ

「先生少し短いとおもいますかすみません」

いい。なかなかいい。水口ニズムが滲んでいる。山本君は君でなければ書けないかもしれないね。変人同士二人、いつまでも続いていけ（岩本先生の批評）

山本君

望月郁文

僕と山本君とは小学校に入学した時から、いや保育所に通っている時からいっしょだ。お父さんはけいさつ所へつとめていて。ちょっと見ると50、60くらいに見える。お母さんはお父さんのわりに若く見える。最近はそうでもないが3、4年の頃は学校帰りによくケンカをした。ちょっとした事からいけんがわかれ、口げんかをする。ぶったりけったりする事はないが口げんかをする事はたびたびある。

山本君は国語が大好きである。読書が好きで図書室の中の本をどんどん読んでいく。先生がよく学力テストの後で「いつも本に親しんでいる者ができるね」とおっしゃったがほんとにそうだと思った。それは山本君が国語のテストの点がいつも良い成績だからだ。国語の学力テストの時、一番は山本君であった。それほど読書に親しみ、国語の成績が良いのに算数はとつてもできない。国語が一ぼんできるのに算数はふつうぐらいだ。僕はふしぎでしょうがない。こんなに差があるのは変だと思ふ事がある。それから図画もきらいでへた。習字もきらいであまりうまくない。

山本君はあまり好かれていてという方でもない。わるい所はすぐけんかを始める。どこまでも勝たなければ気がすまないといったようだ。口はとつてもうまいし、手はすぐ出る。けんかをするのだいたいのは負けてしまう。

山本君は妹思いだ。まだ小さい妹と遊んだり、迎えに来ると一緒に手をつないで帰るなど小さい子供をあやすのもたいへんうまい。お使い、留守番、畑をつだいなどいっしょうけんめいだ。山本君のあの口をきをつけてくれればいい人であろう。

そんなに妹思いになる山本君。それがこの中で僕は一番うれしいことである。口、それは使い方だな。よく使えばいい。意見と悪口は違ふのだし、その点を

山本君にはよく考えてもらいたい。望月君には山本君のよく働く口を研究してもらいたいのだ。(岩本先生の批評)

以上4名の級友が書いてくれた作文(水口君は全文、ほかは抜粋)と先生の批評をご紹介します。改めて読み返してみるとこの頃の自分がどういう児童だったのかがよく分ります。まとめてみますと

対人関係では

1. 怒りっぽくすぐ手が出てぶったり、髪の毛を引っ張ったりする。
2. 口がうまくて口先で人をいじめ、先生に口答えする。
3. 友達から白眼視され、嫌われている。
4. 妹思いで可愛がっている。
5. 家事をよく手伝う。

学科の成績では

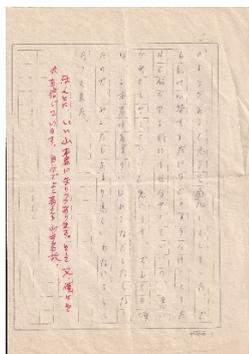
1. 読書好きで色々な知識を書物から得ている。
2. 国語の成績が良く、学力テストでは城内小6年生全員の中で一番だった。
3. 算数はまるでできない。
4. 図画、習字もきれいでへた。

と、いう児童であったようです。4人とも大体同じような事を書いているので、「山本哲照君」は他の級友からも同じように見られていたのでしょう。

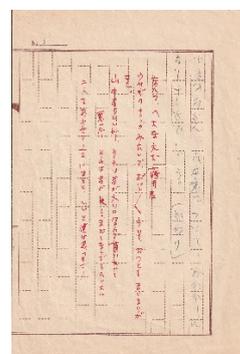
ここまで述べたところで規定の紙数をかなり越えてしまいました。前稿でお話した通り、**70数年を経てなお私の手元に残してある物がもう一つ**あります。それは**小学校6年間の「通知票(通信簿)」**です。各学年の成績と担任教師の言葉の記録です。友達の評価と担任教師の評価とを合わせれば「山本哲照」という児童の6年間の成長過程がかなり分って来るのではないのでしょうか?本稿ではその通知票も併せてご紹介するつもりでしたが、冗長になりそうです。稿を改め「その2」としてお読み頂くことにしたいと思います。(この稿終り)

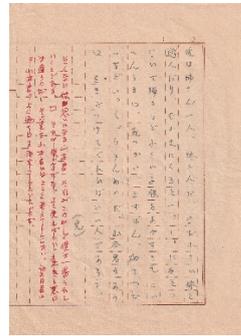
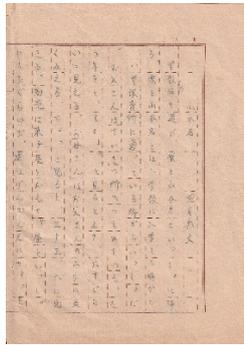
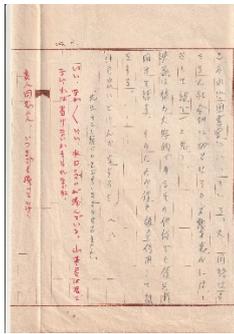
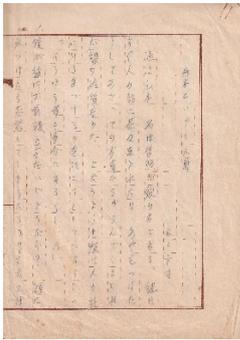


杉本和子さんの作文



藤井暉生君の作文





水口幸治君の作文

望月郁文君の作文



父が書写した杉本さんの作文